

「サクセスフル・エイジング」の再定式化への一考察 —ジェロトランセンデンス理論の到達点と課題—

佃 亜樹*

本稿の目的は、虚弱高齢者を含むより多様な「サクセスフル・エイジング」概念の再定式化のための足がかりをつくることである。まず、老年社会学における「サクセスフル・エイジング」が、適応概念のうち生産性、連続性を重要視する社会的適応を主軸として展開され、それが道具的合理主義の側面とスローガンの機能を有しており、虚弱高齢者（要介護高齢者を含む）を研究射程に含めていないことについて批判的考察を行った。そして、離脱理論の立場からトーンスタムのジェロトランセンデンス理論の動向について整理することで、高齢者の内的宇宙において生じる「老い」の存在論的な変化を個人的適応の過程ととらえることができ、とりわけ虚弱高齢者にとっては、その個人的適応を重視する必要があることが明らかとなった。このことから、高齢者のジェロトランセンデンスの自然な発達を助け個人的適応を図るためには、相互作用論の立場から他者や社会によるジェロトランセンデンスの理解とその戦略的促進が不可欠であることが示唆された。そして最後に、段階的「サクセスフル・エイジング」を提案し、活動理論的「サクセスフル・エイジング」から離脱理論的なそれへの段階的移行をよりスムーズにするために「老い」に対する柔軟な視点の獲得についての戦略的課題を提示した。

キーワード：サクセスフル・エイジング、適応、ジェロトランセンデンス、虚弱高齢者、離脱理論

目次

はじめに

1. 老年社会学の理論体系とサクセスフル・エイジング
 - 1-1. 離脱理論
 - 1-2. 活動理論
 - 1-3. 継続性理論
 - 1-4. サクセスフル・エイジング
 - 1-6. プロダクティブ・エイジングとアクティブ・エイジング
 - 1-7. 「サクセスフル・エイジング」の再定式の必要性和課題

2. ジェロトランセンデンス理論の到達点と課題

- 2-1. 西洋文化と東洋文化としての禪～老年期の発達に与える影響～
- 2-2. ジェロトランセンデンスの概要
- 2-3. ジェロトランセンデンスの発達パターン
- 2-4. ジェロトランセンデンスの実証研究
- 2-5. ジェロトランセンデンスに基づく臨床現場における理論的ガイドライン
- 2-6. ジェロトランセンデンス理論の課題
3. 「サクセスフル・エイジング」の再定式化に向けての一考察
 - 3-1. 段階的「サクセスフル・エイジング」とそれをめぐる課題

おわりに

*立命館大学社会学研究科博士後期課程

はじめに

わが国のみならず、産業の発展した社会が、それに伴い多死多産社会から少子少産社会へと人口転換が生じ人口高齢化が促進されることは、人口学的に広く知られていることである。わが国においても、少子高齢化、平均寿命の伸び、後期高齢者の増加によって、2007年度の高齢化率は20.8%を記録した。高齢化率は今後も上昇を続け、2055年には40.5%に達して、国民の2.5人に1人が65歳以上の高齢者となる社会が到来すると推計されている。（高齢社会白書、2007）。

このような社会の高齢化に伴い、高齢者の社会的役割や「老い」に対する意識が大きく変化してくる（Giddens, 2003）。ここで注目されるのが、老年社会学、老人福祉領域において論究されている「サクセスフル・エイジング」の概念である。この「サクセスフル・エイジング」の議論は、活動理論や継続性理論、プロダクティブ・エイジングに根ざした視点に立つものが圧倒的である。しかし、後期高齢者の増加に伴う要介護高齢者数の増加を鑑みると、虚弱高齢者及び要介護高齢者（以下、虚弱高齢者）を逸脱者の如くとらえるのではなく、それらを「老い」の過程という視点でとらえていくこと必要がある。また、「老い」そのものを、病や逸脱としてとらえないという視点は、ノーマルエイジング、ラディカルエイジング（小倉 2001）と概念化され、議論が進められている。しかし、健康高齢者と虚弱高齢者を同じ過程において捉える作業は未だ十分に進展しているとは言えない。

そこで本稿では、「サクセスフル・エイジ

ング」という近年の研究動向を批判的に検討しつつ虚弱高齢者を含むより多様な「サクセスフル・エイジング」概念の再定式化に向けて考察を深めていきたい。このことによって、超高齢社会¹⁾において増大が見込まれる虚弱高齢者の、よりスムーズな適応を促進するための理論構築に努めたい。

1. 老年社会学の理論体系とサクセスフル・エイジング

老年社会学の理論は、定年退職を背景とした高齢者の役割のあり方と、それへの適応を主な課題としている。そして、研究のキー概念は、活動とパーソナリティである。まず、活動をめぐってパーソナリティが変化すると考えるのが離脱理論、反対にパーソナリティが変化しないと考えるのが活動理論である。このような視点に立つと、継続性理論も後者に位置づけられる。そして、これらの研究の従属変数として最もよく用いられるのが「サクセスフル・エイジング」である。本章では、老年社会学における「サクセスフル・エイジング」が、適応概念のうち生産性、連続性を重要視する社会的適応を主軸として展開され、それが道具的合理主義の側面とスローガンの機能を有しており、虚弱高齢者を研究射程に含めていないことについて批判的考察を行った。

1-1. 離脱理論

老年社会学の理論的歴史は、1961年を境に大きく隔てられる。それまでは漠然とした活動理論が考えられていただけであった（松村、1978）が、1961年にCummingとHenryの共著『Growing Old』によって離脱理論が体系化さ

れた。彼らは、「個人と社会との関係の多くが絶える、また、それらの存続しているものが質的に改められる不可避なプロセス」(Cumming & Henry, 1961, p.211)と離脱を定義し、「老い」に応じて、それぞれの役割が減少すると共に、他者との相互関係も縮小していくことを明らかにした。これらは、社会が高齢者に向けて「役割なき役割」(Burgess, 1960; Rosow, 1974)を期待しており、高齢者自身においてもそういった期待に応え社会からの離脱に向かうことが幸福であるというものである。しかし、離脱理論は高齢者を社会から排斥する理論、高齢者を受動的な存在であると捉えていると(高橋, 2000)批判されることが多く、このことから、これまで提唱されていた活動理論が体系的に考えられるようになった。

1-2. 活動理論

活動理論の論者として代表的なのはハヴィガースト(Havighurst)であり、高齢者は生物学上、健康上不可避な変化を除いて、本質的に中年と同じ心理的欲求をもっており、可能な限り中年期の活動を継続的に維持することで、満足した高齢期を過ごすことができるという(Havighurst, 1963, p.419)(Havighurst, 1980)。そのため、高齢者は縮小する高齢期の役割や低下する社会的地位に対して抵抗し、中年期の「忙しさを保ち、若くあらねばならないということになる(高橋, 2000, p.177)」。

活動理論への主な批判は、役割喪失と獲得について、個人の主体性と内的動機付けを想定しており(Atchley, 1999)、そして、この理論はアメリカの中産階級の確信に基づいていることが挙げられる。また、レモン(Lemon, 1972)の研究以外には、体系的に述べられたものがない

との指摘もされている(古谷野 2003, pp.141-152)。しかしながら、ベティーフリーダンの研究である「老いの泉(Betty Friedan, 1993)」に見られるように、高齢者のネガティブなイメージを払拭することにおいて、活動理論は多くの支持を集めた。

とはいえ、これらの理論のどちらも「老い」に対する過度の一般化の試みであり、多様な「老い」を前にして、両理論の論争は不毛のまま1970年代に終息した。

1-3. 継続性理論

論争は終結しても、離脱理論に対する反証として、成人期から老年期にかけてのパーソナリティの安定性・連続性を示す一連の研究が続けられており(古谷野 2003)、これを継続性理論(Continuity theory)という。また、継続理論の主要な提唱者として知られるアチェリー(Atchley)は、「果たすべき新しい役割を探しだすことよりも、むしろ、これまで彼が既に果たしてきた役割に費やす時間を増やすことによって、定年に対処しようとする(Atchley, 1976, pp.112)」と述べている。すなわち、アチェリーの継続性理論は、高齢者が、自身の過去の経験やこれまでの社会関係を活かすような適応的選択を行ない、社会もまたそれによって安定するというを前提としている。このように、「継続性」は、個人と社会双方によって促進された壮大な適応戦略なのである(Atchley, 1989)。この理論を下支えするものとしてカフスマン(Kaufman 1986)の『The Ageless Self』があり、彼女は、パーソナリティは変化することなく保ち続けられるとする仮説を実証的研究から導き出した。

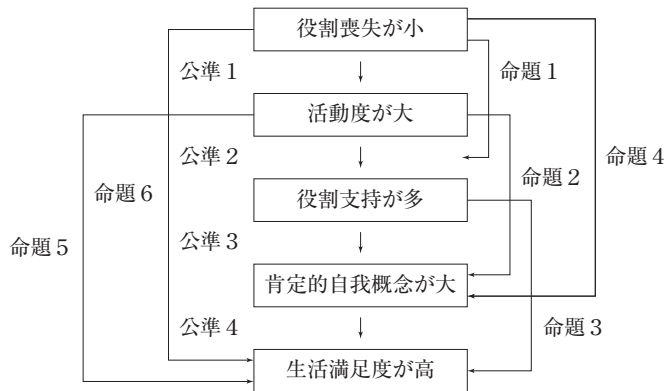


図1 活動理論の体系

柴田博編 2007「第6章 高齢者と社会」『老年学要論』建帛社より引用

1-4. サクセスフル・エイジング

このような社会老年学の理論において最もよく従属変数として用いられたのが「サクセスフル・エイジング」である。その概念は、1987年アメリカのRoweとKahnが高齢者個人の身体的・精神的・社会的な機能の維持や高齢期における適応に焦点を当て、提出した。また、「サクセスフル・エイジング」は活動理論と親和的な関係にあり、1980年代以降サクセスフル・エイジングに関する研究は、プロダクティブ・エイジング (productive aging) や、エイジレス・セルフ (ageless self), ロバスト・エイジング (robust aging), アクティブ・エイジング (active aging), そして、エイジング・ウェル (aging well), ポジティブ・エイジング (positive aging) などのように、様々な類語として発展してきている (小田, 2003a)。

「サクセスフル・エイジング」の主要概念である適応 (adaptation) については、小田が詳細な概念分析を行っているのので、それを参考にしたい (小田, 2003b)。まず「適応」とは、過程概念であり、主体である個人のニーズと客体である環境・社会のニーズをともに充足しうる状

態 (Atuhley 1988, p.373, 1987, p.289) である。また、個人的適応である行動による個人の欲求の満足と、社会的適応である行動の社会的効果の充足 (前田, 1972) に細分化される。また、順応 (adjustment) とは、状態概念であり、環境と調和した状態 (小田, 2003b) であると位置づけられる。

まず、高齢者の心理的に良好な状態 (psychological well-being), すなわち個人的適応に焦点を当てた研究では適応概念は批判されてきた (Larson, 1978)。良好な適応ということに関して評価する側の価値判断が強く働くということ、適応行動が外的条件に大きく左右されるというのがその理由である。しかし、その後も適応概念は、高齢者あるいは高齢期の生活を研究する上で有用な概念として用いられており、「サクセスフル・エイジング」は、老化や高齢期の生活への良好な適応過程・状態として理解されている (小田 2003b)。

これらの背景には、「サクセスフル・エイジング」をめぐる理論的展開と活動理論との深い関連がある。高齢者が一般的な他者としての社会からの役割期待を取得し、その役割を遂行す

ること、ここでは「社会に貢献する（アクティブ・エイジングにおいては、主体的な市民であること）」という役割を遂行することによって、個人の主観的幸福感、生活満足度が増大し個人的適応を可能にし、それらは同時に社会的適応でもあるというものである。

このような、「サクセスフル・エイジング」と活動理論の流れを汲む理論との相互作用は、プロダクティブ・エイジング理論において象徴的に見出される。

1-6. プロダクティブ・エイジングとアクティブ・エイジング

1980年代半ばからアメリカのバトラー (Butler, 1975, 1985) を中心に「プロダクティブ・エイジング (Productive Aging)」が発起し、従来の高齢者像の画期的な転換が図られた。まず、バトラーは1968年に出版した自身の著書、“Why Survive? Being Old in America” (Butler, 1975) の中で、「人種差別や性差別が、皮膚の色や性別をもってその目的を達成するように、老人差別は、年をとっているという理由で老人たちを組織的に一つの型にはめ差別をすること」であると、「ageism (年齢差別)」の定義を行った。そして、高齢になっても生産的・創造的な能力を維持している人が多いにもかかわらず、ステレオタイプの年齢差別によって高齢者の能力が活かされていないことを指摘した。そこで彼は、ボランティア活動や家庭内の無償労働などの貢献も生産性の概念の中を含め「生産性/創造性 (Productivity) (以下生産性)」概念を提唱した。このようにバトラーは、生産性の概念を広く捉えることによって、高齢者を非生産年齢人口として位置づけ高齢化率の上昇に伴い介護や社会保障の負担が増すという考え

方から、高齢者の能力に着目し社会はそれを活かすことができるというように、発想を転換させた。そして、高齢者の生産性の拡大は、高齢者の個人的適応と社会的適応が良好な状態をもたらすと考えたのである。

しかし、「プロダクティブ・エイジング (Productive Aging)」は「道具的 (instrumental)」であり、「経済優先主義 (economistic)」に陥りやすく (Walker, 2002), さらに、これらの理論が想定している高齢者は、健康で、何事も自分一人で決定することができる人々であることから、これらの理論で説明できる高齢者は一部の人々に留まってしまっている (Butler, 1985)。また、このような理論に立脚した場合、虚弱で自立が困難な高齢者などに対する偏見を生じさせる恐れがある。

また、1990年代に WHO が発表した「アクティブ・エイジング (active aging : 活力ある高齢化)」という概念は、ウォーカー (Walker, 2002) らによって精緻化が図られている。前田は「アクティブ・エイジング」の特徴を「雇用や生産活動に限定されず、後期高齢者をも対象とし、生涯にわたるライフコースでの老いるプロセスを意味し、世代間の連帯や公正を重視し、権利と義務の両者を持ち、高齢者の参加とエンパワメントを促進し、国家や文化の多様性 (diversity) を尊重している (前田 2006, pp, 14 ~15)」と述べ、「市民」と「社会」のパートナーシップの重要性を示唆している。また、EU では、1970年代初期から90年代後半にかけての早期引退の促進とその反省から、近年「アクティブ・エイジング」²⁾ 実現のため、雇用と健康、社会保障、教育、住宅など総合的な取り組みの必要性が強調されている。その「アクティブ・エイジング」の内容は、高齢労働者に対する①

継続的な訓練機会の提供，②職場の安全衛生条件の改善，③弾力的な作業編成による多様な働き方の実現，④早期引退促進制度の廃止，⑤積極的労働市場施策の活用，などである。

しかしここでも，実際にアクティブ・エイジングとして強調されているのは，労働政策やボランティアなどの非営利活動の側面においてであり，高齢者が市民活動を担う存在であることが高齢者と社会との積極的な接点となることを重要視している点を鑑みると，活動理論，継続性理論同様に，高齢者ではできる限り活動的であろうとすることが求められていると同時に，社会参加に意欲的なパーソナリティの保持が求められていることがわかる。これらもまた，スローガンの側面が強いとえる。

1-7. 「サクセフル・エイジング」の再定式の必要性と課題

このような老年社会学の動向から，「サクセフル・エイジング」の条件について，(1)長寿(2)高い生活の質(3)生産性(柴田 2006) (4)生活満足・幸福(Palmor, 1979)が挙げられるようになり，離脱理論の傾向の強い老年学者からは，有償労働をふくむ生産性を「サクセフル・エイジング」の条件に入れることに賛同を得られているとはいえないが，彼ら以外からは概ねの同意を得ており，定義として定着している。また，活動的であるということの背景には，「孤独」への否定的視点が含まれていることと，このような研究動向において，虚弱高齢者がその研究の射程にはいっておらず逸脱者として取り扱われてしまっていることに注意したい。

すなわち，高齢者にとって「健康で活動的で自立的である」ということの価値を証明し，身

体的な衰えや依存性を分離した「サクセフル・エイジング」の試みは，加齢という「古い」の困難性と失敗を示す科学的示唆としての潜在的機能を有するのである。その結果，「古い」は以下のように明確にカテゴリー化された。一つは，自立 (self-reliance)，健康 (health)，自然死 (natural death) と救済 (salvation)，によって特徴づけられる成功版と，病気 (disease)，依存 (dependency)，早死に (premature death) と天罰 (damnation) (Cole, 1997 p.162)，そして孤独 (solitude) によって特徴づけられる失敗版である。このことから，コールは，身体的な衰えや依存性のなかにあっても，高齢者は「英知 (wisdom) や精神的な成長 (spiritual growth) というような異なった方法で発達することを認め，成功と失敗というパラメーターを分解する方法が必要である」と指摘する。また，ランダルとケニヨン (Randall and Kenyon, 2000) は，英知 (wisdom) をめぐるナラティブ・アプローチによる研究において，老年期における喪失体験が洞察と精神的な発達を促進する可能性を示唆している。このように，近年，何が成功で何が失敗なのかという現在の「サクセフル・エイジング」の基準，定義自体の見直しへの示唆に富んだ主張がされている。

しかし，生産性と連続性を重視する「サクセフル・エイジング」の背景には，高齢化する社会における生産年齢人口比率の拡大という社会的機能が期待されており，とりわけ，超高齢社会の到来を目前にしたわが国においてはそれが積極的に肯定される傾向があると言える。たとえば，平成12 (2000) 年の厚生白書において提出された「新しい高齢者像の創造」に見られるように，高齢者の退職後の生活適応と主観的満足は高齢者の能力の活用によって促進される

という視点が強調され、「プロダクティブ・エイジング」の理念の浸透が促進されているといえる。しかし、超高齢社会であるからこそ、高齢者の生産性の拡大と同時に、増大する後期高齢者、虚弱高齢者を阻害しない福祉社会の創造に努めなくてはならないのではなだろうか。

このように、社会的にも、学問的にも、虚弱高齢者を含めた多様な「サクセスフル・エイジング」のあり方について検討する必要がある。それには、成功と失敗という基準の見直しを行うこと、もしくは、成功と失敗という二元論的な見方そのものを見直すことが求められる。そこで、多様な「サクセスフル・エイジング」について論究するために、これまで批判の対象とされてきた離脱理論に着目したい。しかしそれは、高齢者は社会から離脱するほうが社会と個人双方にとって良いというものではない。ここで着目するのは、活動をめぐるパーソナリティの変化という、離脱理論の視点である。まず、超高齢社会における虚弱高齢者の「サクセスフル・エイジング」を考察する際、高齢者の生産性の拡大とそれを達成することによる社会的適応を軽視することは難しいのではないかと考えられるからこそ、そういった社会的適応への価値意識やそれによる社会的機能を否定せず、それとの連続性のなかで虚弱高齢者の「サクセスフル・エイジング」について考察する必要があるのではないか。それには、社会的適応への価値意識を超え、ままならない身体と共に生きるなかで個人的適応への価値意識を重視するという、価値意識の転換、パーソナリティの転換が求められる。問題は、そのような価値意識の転換がいかにして行われるという過程にあるのである。

そこで、本小論では、離脱理論の立場に立

つスウェーデンのトーンスタム (Tornstam) の提唱するジェロトランセンデンス理論 (Gerotranscendence) に着目し、虚弱高齢者も含めた「サクセスフル・エイジング」概念の再定式への考察を深めたい。

2. ジェロトランセンデンス理論の到達点と課題

本章では、トーンスタムの提唱したジェロトランセンデンス理論に関する論文をレビューし、本理論の到達点と課題を挙げた。まず、ジェロトランセンデンスは、社会関係の変化、道徳、社会規範などの文化的要因、そして個別に経験するライフイベントに影響を及ぼされていた。そして、ジェロトランセンデンスの発達は、とりわけ虚弱高齢者において個人的適応の重要性を示唆するものであることが明らかとなった。課題は、「超越」「存在論」などの重要概念の定義が十分に行われていないことと、実証研究で得られた結果の概念化がされていないこと、ジェロトランセンデンスの到達が及ぼす社会的意味についての論究が不十分であることが挙げられた。

2-1. 西洋文化と東洋文化としての禪

～老年期の発達に与える影響～

これまでの社会老年学の理論は、内向的あるいは孤独である時間を重要視し、社会貢献活動に積極的でない高齢者、身体的な衰えや依存性の高い状態を「サクセスフル・エイジング」を達成していない状態であると判断し、研究の対象としてこなかった。しかし、トーンスタムが行った孤独に関する調査 (Tornstam, L, 1988) では、役割の喪失や他の損失にもかかわらず、孤独に関する意識は年齢が高くなるほど減少

し、孤独の癒しとしての他者との相互作用は年齢にしたがって減少したという結果を得ていた。そこで彼は、離脱理論の立場から、これまでの相互作用論も、エリクソン (E. H. Erikson) による自我の発達理論も肯定化するなかで、高齢期における生活満足の問題を高齢期以前の物質主義的で合理的な観点から宇宙のかつ超越的な観点へのよりメタ・パースペクティブ分析を行わなければ、「老い」に対する十分な説明を行うことができないと考え、ジェロトランセンデンス (超越的の老い) という概念を提出した。

まずトーンスタムは、「ジェロトランセンデンス—離脱理論のメタ理論的再定式化」(Tornstam, 1989) のなかで、老年研究がメタ理論的なパラダイムに到達するためには、実証主義的な見方も確保しておかなければならないと主張する。それは、禅宗信者の発言は、西洋人のメタ理論的パラダイムの観点からは理解が困難な場合があるからである。たとえば、「あなたと私は同じ実体の一つである」や「現在、過去、未来が同時に存在する」という考え方や (Tornstam, 1996a, p41)、西洋の絵画と禅宗のそれとを見比べたとき、禅宗信者は、無限の広がりや透過的な境界をもつ宇宙世界のパラダイムのなかで生きていることがわかる。また、トーンスタムは、おそらく禅宗信者にとって「西洋人は、制限的で脅迫観念に陥っていて、唯物論的 (materialistic) なパターンを示していると理解されているだろう」と述べている (Tornstam, 1989, p58)。トーンスタムにとって、禅宗信者は、世俗的なイデオロギーとりわけ西洋的な道徳的、社会的価値規範に拘束されない自由な存在として位置づけられており、そして禅宗信者の世界観、内的宇宙のあり方から、ジェロトランセンデンスへの示唆を得たの

である。

このようにトーンスタムは、西洋と非西洋の人々の特質 (essences) を存在論 (ontology) 的に比較することで、西洋的な道徳的、社会的価値がジェロトランセンデンスの発達に及ぼす影響についての仮説を提出した。

2-2. ジェロトランセンデンスの概要

1992年に刊行された“The Quo Vadis of Gerontology: On the Scientific Paradigm of Gerontology,”において、トーンスタムは「私たちは高齢者に私達の基準や理論を押しつけている。同時に、理論上の予測からの逸脱が異常で、病理学的であると、私達の決めた用語を当てはめてしまっている。(Tornstam, 1992, p322)」と指摘し、更に、これまでの老年学研究を「学際の神話」とであると厳しく批判した。すなわち、重視すべきは個人的適応であって、社会的適応を過度に重視したこれまでの研究を強く批判したのである。その後、「A Theoretical and Empirical Exploration」と題された1994年の論文 (Tornstam, 1994) において、加齢に伴い個人に認められる連続的な変化について触れ、それらをジェロトランセンデンスとして位置づけている。それから彼は、ジェロトランセンデンス理論について語る場合に、そうした変化をジェロトランセンデンスの徴候や次元として記述するようになった (Tornstam, 1996a)。また、老年看護、介護現場のスタッフに対する調査においては、高齢者を取り囲む身近な他者が、活動理論的価値規範に基づき活動的でない思考や行動を「逸脱」として捉えてしまっている実体を明らかにし、ジェロトランセンデンスの概念を彼らが共有化することによって得られる効果について検証した。

ジェロトランセンデンスの特徴を挙げると以下のようによまとめることができる。

- i. ジェロトランセンデンスの理論は、活動理論や、「若い」を個人の発達過程にあるものであるというエリクソンの発達理論に反するものではないが、個人が「英知」によって「自我の統合」を果たし、その上で過去を振り返って満足しているというエリクソンの主張とは異なる。
 - ii. ジェロトランセンデンスは、「若い」(高齢期を生きるというプロセス)に伴う自然な発達の過程である。
 - iii. 離脱理論が引き籠もりと結びついているのに対し、ジェロトランセンデンスは社会活動と明確に相関関係がある。特に、個人の主導権を与えられた活動において。
 - iv. ジェロトランセンデンスの発達には「孤独」の必要性が示唆される。
 - v. 高い段階のジェロトランセンデンスは、生活満足度と社会活動の満足度の両方ともが高い段階にある。
 - vi. 社会活動は、生活満足の本質的な要素としては弱い。
 - vii. ジェロトランセンデンスには三つの次元がある。これについては、小田・中畠(2001)による要約を参考にした。
- (a)宇宙的次元：時間と空間の再定義—過去と現在の境界の超越、世代的連続性の自覚、死に対する恐怖が消えて生と死についての新しい認識、生命の神秘性の受容、小宇宙の中に大宇宙を経験する喜び。
- (b)自我の次元：自我の再定義—自己の隠された面の発見、自己中心的世界からの撤退、肉体の超越、自己の超越—利己主義から利他主義への移行、内面の子どもの再発見、自我の

統合。

- (c)社会関係の次元：関係の重要性と意味の変化—表面的な関係に対する関心の減少と選択的關係、役割の再定義(時には役割放棄)、無垢の解放、現代的禁欲主義—財産の重さの理解と禁欲主義からの自由、日常の知恵(善悪の区別や判断の保留、アドバイスを与えることの難しさの認識、善悪二元論の超越。

2-3. ジェロトランセンデンスの発達パターン

トーンスタムと同じ大学の研究チームに属する Wadensten & Carlsson は、2003年「Theory-driven guidelines for practical care of older people, based on the theory of Gerotranscendence」(Wadensten & Carlsson, 2003)において、ジェロトランセンデンスの発達に影響を与える要因について分析し、人生の途上で遭遇するさまざまな危機(life crisis)、文化的要素(cultural element)、世話志向性(caring climate)は、ジェロトランセンデンスの発達過程を阻害し、促進しもすることを明らかにした。すなわち、人間が社会的存在であるが故に、個人のジェロトランセンデンスの発達は、歴史的/文化的要因と深いかわりがあるのである。また、それらは他者との相互作用によって内在化されるという視点から、ジェロトランセンデンスの発達において他者の存在が強い影響を及ぼすと考えられる。

またトーンスタムは、2003年の「Gerotranscendence from young old age to old old age」(Tornstam, 2003)において、ジェロトランセンデンスの発達パターンを提示した。それは、1995年に行った調査(2002人のスウェーデン人回答者(20-85才)と、2003年に行った調査(1,771人のスウェーデン人回答者(65-104才))の両調査を比較しつつ分析されている

(Tornstam, 2003)。1995年度の調査においては、ジェロトランセンデンスの発達における性差に着目しており、85歳以上の高齢者における特性をとらえることができなかったことやジェロトランセンデンスと生活満足度に相関関係が見出せなかった等の課題が残った。そのため、2003年度の調査において、それらの課題をより詳細に検証するとともに、新たに以下のことを検証した。

まず、ジェロトランセンデンスの発達において、宇宙的超越 (Cosmic transcendence)、一貫性 (Coherence)、孤独 (Solitude)、の必要性のなかに、発達上の変化のパターンがあることを明らかにした。それらは、社会的マトリックス要因 (social matrix factors = 性別、年齢、婚姻、社会的地位、住宅、前の職業、年収、婚姻関係、子供との関係、活動) と事件影響要因 (incident impact factors = 病気や人生における危機) による影響の差異において検証された。以下はその詳細である。

- i. 宇宙的超越スケールとジェロトランセンデンスとの関係の特徴は以下のようにまとめられる。
 - ・宇宙的超越スケールは年齢と共に社会的マトリックス要因と事件影響要因によって影響をうけつつ上昇するが、65才以上の老年期にはいると両要因による影響をうけなくなる傾向がある。
 - ・人生の危機は高齢男女において異なった影響を及ぼす。65才以上の女性において人生の危機は宇宙的超越スケールに対する影響を失う。
 - ・過去2年以内に生命危機を経験した95才以上の男性は、宇宙的超越スケールが低下した。宇宙的超越スケールが低下する者の特徴は、

そのとき、またはかつて自営業であったか、宇宙的超越スケールが高い高学歴者であった。

- ・生活満足度と社会的な活動は、宇宙的超越と強い相関関係にある。
- ii. 一貫性スケールとジェロトランセンデンスとの関係においては、老年期における社会的マトリックス要因と事件影響要因による影響という点において、宇宙超越とは異なることが明らかとなった。それは、両要因が独立して影響を及ぼすという点である。その特徴は以下のようにまとめられる。
 - ・男女共に、年齢と共に成人期初期から一貫性スケールが上昇する。
 - ・男性は、35～44才の間で一時的に低下する。
 - ・男女共に、65～74才の間に一貫性スケールは最大値に達し、その後平らになる。
 - ・男女共に、65～94才と比較して95才以上から一貫性スケールがなだらかに低下する。
 - ・一貫性スケールにおいて、65才以上の男女において差はなかったが、性差以外に影響を及ぼす因子として以下が挙げられる。
 - * 離婚経験のある未婚の男女は、未亡人と男やもめ、そして既婚の男女、同棲している男女と比較して、一貫性スケールが低い。
 - * 生命の危機または病気を経験した者の一貫性スケールは低い。
 - * 高所得者は、一貫性スケールが高い。
- iii. 孤独スケールは、宇宙的超越スケールと似た傾向を示す。そして、それらは年齢によって発達し、やもめ暮らしや、離婚、病気などのマトリックス要因と事件影響要因による影響をうける。

最後にトーンスタムは、宇宙的超越と生活満足度との関連について再度取り上げ、これまで

の研究で両変数の強い相関関係が認められており、今後、その関係に関する詳細な研究が必要であることを示唆している。

2-4. ジェロントラセンデンスの実証研究～ ジェロトランセンデンスの実用性～

トーンスタムは、高齢者介護などの臨床現場のスタッフや近親者が、ジェロトランセンデンスの自然な発達を阻害している可能性について言及し、ジェロトランセンデンスの普及も重要な課題であることを示唆している。そこで本項では、老人看護、介護に従事する援助者、そして高齢者本人において、ジェロトランセンデンスの理論的理解の必要性を裏付ける実証研究を紹介していく。また、これらの研究は、ジェロトランセンデンスが実用性に富んだ研究であることを裏づけている。

2-4-1. 活動理論中心の理解

看護従事者におけるジェロトランセンデンス的行動についての解釈の共通点は、彼らが活動理論に基づいており、ジェロトランセンデンス的行動を認知症の徴候として理解していたことである。このように多くのスタッフは、活動理論を主軸として高齢者の行為を理解しており、ジェロトランセンデンス的行動は、無気力もたらす否定的な結果とみなされていた。このことから、高齢者とスタッフとの関係に関する新しい枠組みの構築が不可欠であるといえる。(Tornstam & Tornqvist, 2000)

2-4-2. 理論的ツールの必要性

スウェーデンで働く高齢者看護職員に対し、「高齢者の発するジェロトランセンデンスのサインをどのように解釈したか」についての面接

調査を行った。多くの看護職員が高齢者のジェロトランセンデンスのサインに気付いたと述べた。しかし、彼らの解釈は非常に可変的であった。また、いくつかのケースによっては、そのようなサインは「病理学的である」と解釈されるかもしれないと指摘された。このような指摘は、スタッフには他の解釈をするどんな理論上のツールも持っていないことが原因であると考えられる。今後、看護職員において、高齢者の示す様々なサインに対してより適切な理解を示すためにも、ジェロトランセンデンスに対する理論的理解が求められ、それによって、看護現場での新たなアプローチの開発が可能となるであろう。(Wadensten & Carlsson, 2001)

2-4-3. 高齢者からみたジェロトランセンデンス理論の実用性

高齢者グループに自身が歳をとることについて議論していただいた。そして、ジェロトランセンデンスの理論についてのビデオプレゼンテーションを行い、さらに、ビデオに描かれていた『年をとること』の理論について議論していただき、これを高齢者自身の老いる経験に基づいて再考察していただいた。その結果①すべての女性には、何らかの場面で理論に一致した『年をとること』の経験があった。②彼らは、ビデオで描かれた「古い」の理論が、自身の思い描くものに合致すると概ね同意した。③彼らは、グループで「古い」について議論することがとても興味深く、実り多いと述べた。④ジェロトランセンデンスは、彼らに「古い」のより前向きな見地を示唆し、それらは有益であると評価された。(Wadensten, 2005)

これらの調査で明らかとなったことは、『まず高齢者を取りまく他者の立場とりわけ臨床現

場においては、①活動理論が支配的であった。②しかし、ジェロトランセンデンスという新たな視点を獲得することによって、これまで病理的な兆候としてとらえられてきたものに対する新たな理解が得られた。③今後の課題は、明確な判断を下すために理論的ツールの獲得である。そして、④ジェロトランセンデンスは高齢者の立場からみても共感されるものである。⑤そして、ジェロトランセンデンスという新たな視点は、高齢者自身が自己の「老い」に対する見方をより肯定的なものにする』ということである。とりわけ①、②は、社会福祉領域の援助技術において重要な示唆であると言える。しかし、ジェロトランセンデンスの兆候と認知症の病理的な兆候が混同されることが多かったと指摘するにもかかわらず、両者の区別の困難性に着目していないことには注意が必要である。それが明確に行われないことには、ジェロトランセンデンスの理解に浸透を図ったとしても十分であるとはいえない。それには今後、ジェロトランセンデンスと老年医学との連携が期待される。

2-5. ジェロトランセンデンスに基づく臨床現場における理論的ガイドライン

トーンスタムと同じ研究チームであるWadenstenとCarlssonは、介護、老人看護の臨床現場において、職員がより高齢者個人の自由なジェロトランセンデンスの発達を促進するためのガイドラインを作成した。作成方法は、フォーカス・グループインタビュー法である。まず、高齢者施設の職員で構成されたグループにジェロトランセンデンス理論について議論していただき、そこで挙げられた提案をガイドラインの組織化の基礎として用いた。その結果、

「個人」「活動」「組織」という3つのレベルにおけるガイドラインが引き出された。(Wadensten & Carlsson, 2003)

i. 個人について (Focus on the individual)

〈テーマ1〉ジェロトランセンデンスのサインに類似しているふるまいが老化に伴う正常なサインである可能性を認めてください。

○：ジェロトランセンデンスの徴候を老化に伴う通常のサインと認める。

×：ジェロトランセンデンスの徴候を好ましくないと考える。

×：ジェロトランセンデンスの徴候がみられた際、常に、それが誤りであると指摘し、彼らのふるまいを変えさせようとする。

〈テーマ2〉外見による先入観をもたないでください。

○：健康と物理的な制限に焦点を合わせない話題を選ぶ。

×：常に、高齢者が通常どのように感じるかについて、入居者 (residents) に尋ねる。

〈テーマ3〉時間に対し、より多角的な定義を与えてください。

○：過去、現在、将来の境界が越えられるように、高齢者には時間の異なる認識があることを理解し、尊重する。

○：高齢者が過去の体験を話す機会を積極的につくる。聞き手となる人にそう依頼することも有効である。

×：常に、時間について老人の誤りを指摘する。たとえば、「それは過去のことですよ」など。

×：常に、高齢者を現実世界に戻そうとする。

〈テーマ4〉死に関する考えや会話をしてください。

○：高齢者の誰かが死について話すとき、それを聞き、彼らに話しをさせる。そして、質問をして、更なる考えを刺激する。

○：入居者のうち誰が死んだのか、入居者である高齢者に知らせる。そして、それについて話すことを妨げない。

×：高齢者が死について話し出したら、うまく他の話題に話しをそらせる。

〈テーマ5〉高齢者の自己啓発を容易にして、それを促進するような話題を提供してください。

○：高齢者がどのように感じるか尋ねるかわりに、朝、彼らが何を夢見たかについて尋ねる。彼らが夢をみていた場合、夢についての質問とそれが意味するかもしれないものを尋ねる。

○：幼児期について回想してもらい、そして、彼らの人生がどのように展開してきたのかについて話してもらう。

ii. 活動について (Focus on activities)

〈テーマ6〉新しいタイプの『活動』を受け入れ、構築し、採用して、高齢者のジェロトランセンデンスの発達を促すために、彼らを励まし支えてください。

(下記に挙げられるいくつかの方法は、実行可能なものであり、適切であった。)

○：高齢者に、一人でいたいのか、『活動』に参加したいかどうか、彼ら自身に決めてもらう。

○：高齢者によるグループまたは個々の会話において、『年をとること』について議論し、彼らのジェロトランセンデンスの発達を促す。

○：回想法 (reminiscence therapy) を導入する。例えば生活史を書きとめる、生活史について話して、スタッフと討議する、他的高齢者と生活史について話しをするなど。

○：思い出の品を配置する。回想によって、集団的無意識と接触することが期待される。

×：準備された活動に参加することが、常に最良の手段であると考ええる。

×：準備された活動に理由なく参加しない高齢者がいれば、参加するよう口うるさく言う。

×：準備された活動に理由なく参加しない高齢者がいれば、なぜ参加しないのか質問したり、多くの時間を一人で過ごしたがつていることを問題視する。

iii. 組織について (Focus on organization)

〈テーマ7〉静かにすることや、静寂な場所で時間を過ごすことを奨励し、促進してください。

○：休息の瞬間や、高齢者が部屋で一人の時間を過ごしたいという気持ちを尊重するよう、組織し計画することを心がける。

○：高齢者が自室で食事を取りたいと望むなら、そうできるように組織する。

×：以下のことを推奨するために、メインルームで大人数の活動を組織する、または一日中、談話室でテレビやラジオをつける。

×：高齢者に理論とガイドラインについての知識を身につけさせる。

×：高齢者がガイドラインに従うように、組織づくりをする。

×：高齢者がガイドラインを成し遂げられるよう、トレーニングを受けさせる。

このようなガイドラインを作成することによって、援助者の価値判断によって生じる高齢者に対する援助行動の差異や、ジェロトランセンデンスの発達を阻害する援助行動を出来る限り排除しつつ、発達の促進を図ることができる。

そして、本ガイドラインは、個人、活動、組織という多角的な視点で具体例を挙げられており理解しやすい。また、臨床現場においては、高齢者の正常なジェロトランセンデンスの発達を助けるための「環境づくり」に着目し、決して高齢者自身に教育的対応を行わないという姿勢が保たれていることがわかる。これらは、ジェロトランセンデンスが自然な発達の過程であり、教育による社会化を促すこととは異なることが強調されているといえる。

しかし、これらのガイドラインに沿った対応をするには、高齢者一人ひとりの判断、意見、そして彼らの語りについて個別に対応する場面が多く必要となっており、人材の確保という問題を解決しなければ実行は困難であろう。

2-6. ジェロトランセンデンス理論の課題

このように、社会関係の変化、道徳、社会規範などの文化的要因、そして個別に経験するライフイベントに影響を及ぼされ、とりわけ人々の「人生の危機を乗り越えようとする、または乗り越えてきたこと」による内的宇宙においての変化が、ジェロトランセンデンスの発達の促進に寄与することが明らかとなっている。以上が、ジェロトランセンデンス理論の到達点である。また、ジェロトランセンデンスは、未だ発展段階にある理論であり、以下のように、いくつかの批判や課題点も挙げられる。

2-6-1. 批判1：ジェロトランセンデンスの構造の可視化

ジェロトランセンデンスは、「老い」（高齢期を生きるというプロセス）に伴う自然な発達であると主張されており、重要なのはその媒介変数としてのライフイベント、身体機能の変化、

社会関係の変化である。しかし、そのようなジェロトランセンデンスに影響を及ぼす多くの変数同士の関連を明確に概念化できていない。このことから、ジェロトランセンデンスの構造を可視化することが困難となっている。

2-6-2. 批判2：トーンスタムの本質主義的、個人主義的な視点

Håkan Jönson と Jan Arne Magnusson もまた、ジェロトランセンデンスのプロセスを、「自我の再構成や他者との関係（基本的な実存的問題の新たな理解のような）の再構成の経験であり、そして、ジェロトランセンデンスの三つの次元は、存在論的な変化である」と指摘する。そして彼らは、トーンスタムのジェロトランセンデンス理論について以下のように批判している。（Håkan & Jan. 2001, p, 320）

トーンスタムは、人間の意識における“us”と“them”という質的な区分を、“Westerners”と“Orientals”のような the Self と the Other という非常に本質主義的（essentialist）な視点でとらえている。また、社会的な環境がagingの「自然な」発達の障害ともなり潜在的な力ともなるとagingにおける内的な個性を強調することは、非常に個人主義的（individualist）な視点である。

トーンスタムにとって禅宗信者は、世俗的なイデオロギーとりわけ西洋的な道徳的、社会的価値規範に拘束されない自由な存在であり、彼らの内的宇宙とジェロトランセンデンスの世界観とを重なり合わせている。しかしその際、西洋に居住する禅宗信者、東洋に居住する西洋人などの存在は想定されておらず、西洋的な道徳的、社会的価値規範と、禅宗的な思想という区分を空間的な区分と同義に用いているのである。

2-6-3. 批判3：実証性重視の傾向

トーンスタムと彼らのチームは、ジェロトランセンデンスの理論的精緻化よりも、調査研究によるジェロトランセンデンスの実証性の検証に力を注いでいる。まず、「超越」に関する概念定義、「存在論的な変化」に対する詳細な理論的説明がされていない。また、ジェロトランセンデンスという「存在論的な変化」が存在することの実証研究を中心に展開しており、高齢者という社会的存在に対する説明が不足している。すなわち、前者の存在論が高齢者の内的宇宙における老いという存在そのものと存在者との関係に着目したものであれば、後者は、実在論的な高齢者という存在者の社会的存在論であるといえる。そして、「存在論的な変化」に関して、Håkan と Jan は、ジェロトランセンデンスのプロセスを、「老いの再魔術化 (The re-enchantment of aging)」(Håkan & Jan, 2001, p, 326) と表現している。このようにジェロトランセンデンスを「老い再魔術化」として位置づけるならば、ジェロトランセンデンスは社会学においても重要な研究課題であるといえよう。そして、社会学的な視点において、「老いの再魔術化」がもたらす社会的な意味についての考察も必要となってくると筆者は考える。

2-6-4. 批判4：「超越論」の概念規定の未徹底

批判3と関連した事項として、ジェロトランセンデンス理論は、「存在論」だけではなく、その基幹概念である「超越論」についての概念定義を明確に行っていない。ジェロトランセンデンスで用いられる「超越」とは、Håkan & Jan が指摘するように「再魔術化」であり、「俗から聖へ」ととらえてよいのか？また、生産性から

の離脱という、社会的な側面における「超社会化」的側面について更なる言及が求められるのではないだろうか。

3. 「サクセスフル・エイジング」の再定式化への一考察

トーンスタムが指摘する「西洋において重要視される道徳的、社会規範」の浸透は、近代化による「主知主義的合理化」による「老い」の「意味」の喪失であり、「道具的合理性」の追求によって「未曾有の非生産集団 (老人) を生ぜしめ」(木下, 1990, 1993) 高齢者を非生産的な存在として位置づけてしまった。その結果、定年退職後の高齢者のように生産性から離脱せざるをえなくなった高齢者は、自身の存在そのものに対するニヒリズムを克服し、生産性から離脱する自身への葛藤を克服するために、常に自己再帰的に「老い」と対面し自身にとっての「老い」とはなんであるのかの問いなおしをおこなわなければならない。そのなかで、高齢化する社会は、プロダクティブ・エイジングに基づく発想の転換に伴い、高齢者に向けて活動的であるという役割期待を向け始めた。連続性・生産性を保持できる健康高齢者は、その役割期待に応えることが「できる」が、虚弱高齢者はそうはいかず葛藤が生じてしまう。このとき、虚弱高齢者において、「できない」のではなく「しない」という意味づけ (Tornstam, 1996b) が可能となり葛藤が克服されることで、個人的適応が達成されるといえる。

このように、ジェロトランセンデンス理論とは、高齢者の内的宇宙において「老い」そのものの「存在」が質的に変化していく、「老い」の存在論的な変化過程であり、これらはポストモ

ダニズムの展開であるということが出来る (Tornstam, 1996b, 1998)。また、「サクセスフル・エイジング」理論は、生産性と連続性を重視するかたちで展開されてきたことは、「I。」において確認してきた。これに対し、生産性から離脱する者をも射程とした「サクセスフル・エイジング」について考察する場合は、離脱理論の立場から高齢者の「老い」をよりメタ・パースペクティブの視点において捉えることの重要性を強調したトーンスタムのジェロトランセンデンス理論から重要な示唆を得ることができ、それは以下のようにまとめることができる。

3-1. 段階的「サクセスフル・エイジング」とそれをめぐる課題

1. 個人的適応の重要性を重んじる新たな価値

高齢者の社会的適応と個人的適応は双方共に達成されることが重要であるが、とりわけ生産性を求められる社会的適応が困難な虚弱高齢者においては、個人的適応を重視し、それらを社会的にも評価することが重要である。そのためには、まず高齢者の周囲を取り囲む他者や社会が、個人的適応を重視するという価値意識を社会的に認め、高齢者の個人的適応を妨げないための戦略を立てる必要がある。すなわち、「活動的な高齢者という役割期待」や「役割なき役割という役割期待」ではなく、高齢者がそれらから自由になれるような対応、(2-5で挙げられたガイドラインのような戦略的対応)が求められるのである。

とはいえ、超高齢社会における高齢者の生産性の維持、開発は重要な課題であり、それらのスローガンの側面の担う社会的機能を一概に批判することはできない。また、とりわけ健康高齢者においては、それらの役割期待から完全に

自由になることや、役割期待がなくなることは考えにくい。すなわち、超高齢社会における生産年齢人口の拡大や高齢者の生産性の拡大の必要性が求められるなかで、健康高齢者は他の若い世代の者と同様に、市民として社会的負債の償却に始まる自由³⁾を得る存在として位置づけられることは筆者にとって批判の対象ではないということである。重要なことは、虚弱高齢者を前にした際、生産性そして連続性の価値の見直しを図らなければ、それらは虚弱高齢者を阻害してしまうこととなるのであり、筆者はそれを批判の対象としているのである。

このように、虚弱高齢者においては、彼ら自身が生産性、連続性の価値意識から自由になること、または社会や彼らの周囲を取り囲む他者が、虚弱高齢者をそれらから自由な存在として取り扱うことが、彼らの個人的適応にとって不可欠となる。すなわち、とりわけ虚弱高齢者において、個人的適応の重要性を重んじる新たな価値の創造が求められるのである。

2. 段階的「サクセスフル・エイジング」～「老い」に対する柔軟な視点～

個人的適応の重要性を重んじる新たな価値を「サクセスフル・エイジング」においても代入するならば、これまでの、一貫性を伴う成功と失敗という二元論的「サクセスフル・エイジング」ではなく、健康高齢者のそれと虚弱高齢者のそれとにおいて異なる次元の「サクセス」の基準を設けることが求められる。ここで重要なことは、何が「サクセス」であるのかという価値判断が、加齢に伴う様々な変化の過程のなかで、多様であると同時に段階的である必要があるということである。すなわち段階的「サクセスフル・エイジング」である⁴⁾。

段階的「サクセスフル・エイジング」には、同一過程において多様な「サクセスフル・エイジング」が存在するという認識が重要である。まずは、社会的適応と個人的適応の両方が重要視される「活動理論的サクセスフル・エイジング」(主に健康高齢者を対象)と、より個人的適応が重要視される「離脱理論的サクセスフル・エイジング」(主に虚弱高齢者を対象)という2段階区分を設定する。そして、前者と後者どちらかをより望ましいとするのではなく、どちらも肯定的にとらえられる必要がある。最も重要なことは、前者から後者への段階的移行がスムーズに行われることである。そのために、高齢者自身そして彼らを取り囲む他者、社会において「老い」に対する柔軟な視点の獲得が求められる。

すなわち、これまでの社会老年学は定年退職に伴う適応問題を取り扱っていた傾向が強いが、今後は、その後の虚弱な身体との関係においても着目し、高齢期の長期化に伴う段階的視点を導入しなければならない状況となったといえる。(定年退職⇒生産性・連続性の維持(パーソナリティの維持)⇒虚弱な身体⇒生産性・連続性からの離脱(パーソナリティの変化))

3. 離脱理論的「サクセスフル・エイジング」の課題

虚弱高齢者を対象とした離脱理論的「サクセスフル・エイジング」とは、ジェロトランセンデンスの発達、高次のジェロトランセンデンスへの到達を指す。すなわち、身体的な衰え、依存性が増すことによって生産性が保てなくなった虚弱高齢者が、世俗的なイデオロギーとりわけ西洋的な道徳的、社会的価値に拘束されない自由な存在となることで、個人的適応を達成し

ていくというものである。しかし、虚弱高齢者が増えると介護や社会保障の負担が増すという事実と対面し、世代間対立が顕在化するなかで、離脱理論的「サクセスフル・エイジング」が受け入れられるかという問題は深刻である。また、ジェロトランセンデンスがわが国においても適応可能であるのかの検証を行う必要がある、これらは根本的な課題である。

おわりに

「サクセスフル・エイジング」が高齢者個人の問題にとどまらないのは、人間が社会的存在であるからであり、高齢者が自身の「老い」に満足するかどうかは、他者との相互作用のなかで自身に向けられる評価や期待に大きく影響される。また、わが国は、地方分権化、「地域福祉の主流化」⁵⁾として位置づけられるように、福祉社会の創造を促進している。それには、強い市民だけでなく弱い市民をも含めたソーシャル・インクルージョンを達成するために、強い市民から非生産的な弱い市民に対する、そして弱い市民自身に内在化されたスティグマ取り除くことは重要な課題であり、またそれらは、弱い市民としての高齢者が自身を否定することなく幸福に生きるためにも不可欠である。このように、本小論のテーマとして取り上げた「サクセスフル・エイジング」の再定式化は、弱い市民を排除しない福祉社会の創造に向けた試みの1つであると言える。

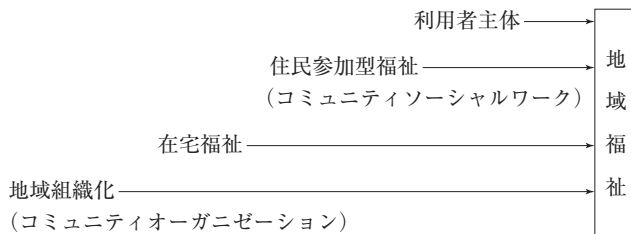
そして、再度、トーンスタムが彼の2003年度の論文に着目したい(Tornstam, 2003)。彼はそのなかで、「宇宙的超越は、(95歳以上の特定の条件化にある男性以外は)人生の危機や病気などの経験を経ることによって促進される」こ

とを明らかにし、また「宇宙的超越は生活満足度と強い相関関係にある」ことを取り上げ「危機は、脅威と好機の両方をもたらす可能性があり」「これらについてのより深い理解を得るためには、おそらく質的な方法を使用しなければならないだろう」と、ジェロトランセンデンスにおける質的調査の必要性を示唆している。虚弱高齢者の「サクセスフル・エイジング」研究においても、質的調査によって、高齢者が自身のライフイベントをどのように捉え直しているのか（内的宇宙の構造）について詳細な分析を行うことで、彼らの見出す「古い」の「意味」に触れることができるといえ、それらへの取り組みを通してわが国におけるジェロトランセンデンス理論の適応可能性に検証を行うことと、ジェロトランセンデンス理論の理論的発展の二つを今後の課題としたい。

注

- 1) 平成16年版『高齢社会白書』より、「一般に、高齢化率が7%を超えた社会を「高齢化社会」、14%を超えた社会を「高齢社会」と呼んでいる。(中略)平成7年に制定された高齢社会対策基本法は、「我が国の人口構造の高齢化は極めて急速に進んでおり、遠からず世界に例を見ない水準の高齢社会が到来するものと見込まれている」(前文)と述べており、法律として初めて「高齢社会」の用語を使用したものである。

60, 70年代 80年代 90年代前半 90年代後半 21世紀初頭



地域福祉概念の成立

武川正吾「地域福祉の主流化 福祉国家と市民社会Ⅲ」法律文化社2006/7/30 P.25 ()は筆者加筆

なお、今後到来が予想される高齢化率の一段と高い社会を「超高齢社会」と呼ぶことがあるが、これについても特に明確な定義があるわけではない。」

本小論においては、高齢化率7%、14%と単純に7の倍数である21%を超高齢社会の参考基準として考えている。

- 2) ・EU ホームページ (European Employment Strategy) http://ec.europa.eu/employment_social/employment_strategy/index_en.htm より
- 3) 「自然的共存は一つの事実である。この共存の事実によってすべての人に課せられる負債を、各人相応にそれぞれ承服せざるかぎり、社会正義は遂に実現せられぬ。この負債は人間の自由があらかじめ負いたる負担である。真の自由は、この社会的負債の償却に始まるべきものである。(レオン・ブルジョア1926 pp.110-111)」
- 4) 段階的「サクセスフル・エイジング」の提唱と同時に、それもまた一貫性を段階的に置き換えただけの二元論的視点であるという批判にも答える必要があるだろう。まず、人間は社会的存在であり、個人が社会や他者からの役割期待に応えることで社会が成立し、維持されていく。すなわち、社会的適応を否定することはできないのである。しかしながら、それによる弊害としての虚弱高齢者の阻害も容認するわけにはいかない。そこで、虚弱高齢者という生産性の求められる社会的適応が困難な者に対する、新たな価値の創造を求めているのである。これらは、既存の価値との段階的な変化である。
- 5) 武川は、わが国における地域福祉の歴史的発

展を「第一の改革 (明治維新)」「第二の改革 (戦後改革):「形式分権・実質集権」「第三の改革 (分権改革):1990~1999年」「第四の改革:2000年以降」四つの改革に分類し、「施設から在宅へ」そして地方分権化などの、地域を主体として社会福祉の展開への傾斜を「地域福祉の主流化」と概念化した。(武川 2006)

引用・参考文献

- 松村健生. 1978. 定年退職と社会的適応: 活動理論と離脱理論の再検討. 季刊社会保障研究, 14 (2), pp56-69.
- Cumming & Henry, 1961, *Growing old: the process of disengagement* New York: Basic Bks.
- Burgess, E. W., 1960, *Aging in Western Societies*, University of Chicago Press.
- Rosow, I., 1974, *Socialization to Old Age*, California, University of California Press. (嵯峨座晴夫他訳. 1983. 『高齢者の社会学』早稲田大学出版部.)
- 高橋幸三郎. 2000. 高齢期の生活適応について説明する理論的枠組: 加齢に関する社会理論について. 東京家政学院大学紀要, 40, pp175-180.
- Havighurst, R. J. 1980. *Successful aging*. In R. H. Williams, C. Tibbitts & W. Donahue (Eds.) *Processes of aging*. New York. ARNO PRESS
- Havighurst, R. J. 1980. *Successful aging*. In R. H. Williams, C. Tibbitts & W. Donahue (Eds.). *Processes of aging social and psychological perspectives Vol.1*, (pp.299-320). New York. ARNO PRESS New York Times Company.
- Atchley, C. P. 1999. *Continuity and adaptation in aging*. Baltimore, Maryland. The Johns Hopkins University Press.
- Lemon BW, Bengtson VL, Peterson JA, 1972. *An exploration of the activity theory of aging*, *Journal of Gerontology*, 27, pp.511-523
- 古谷野亘 2003a 「サクセスフル・エイジング, 幸福な老いの研究」『新社会老年学』ワールドプランニング
- Betty Friedan 1993. *The fountain of age*, New York: Simon & Schuster
- Atchley, 1976. *The sociology of retirement*, Cambridge, Mass.: Schenkman Pub. Co.. -New York: distributed by Halsted Press
- Atchley, C. P. 1989. *A continuity theory of normal aging*. *The Gerontologist*, 29(2), 183-190.
- Kaufman S. R., 1986, *The Ageless Self; Sources of Meaning in late life*, The University of Wisconsin Press,
- Atuhley, R. C. 1988, *social Forces and Aging: An Introducing to Social Gerontology (fifth edition)*, Belmont, California, Wadsworth.
- Atuhley, R. C. 1987, *Aging: Continuity and chang*, Belmont, California, Wadsworth.
- 小田利勝 2003 「サクセスフル・エイジングの概念と測定方法」『人間科学研究』11巻1号 pp17-38
- Lawton, M. P., 1975, "The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale: A Revision," *Journal of Gerontology* 30: 85-89.
- Butler, R. N., 1975. *Why Survival?: Being old in American*. Harper & Row, Publisher. (内藪耕二監訳. 1991 『老後はなぜ悲劇なのか? —アメリカの老人たちの生活—』メヂカルフレンド社, p.15
- Butler, R. N., & Gleason, H. P., 1985, *Productive Aging: Enhancing Vitality in Later Life*. SpringerPub Co. (岡本祐三1998 『プロダクティブ・エイジング—高齢者は未来を切り開く—』日本評論社)
- 前田信彦 2006. 『アクティブ・エイジングの社会学: 高齢者・仕事・ネットワーク』ミネルヴァ書房
- Walker. A, 2002, *A Strategy for Active Aging.*, *International Social Security Review*, Vol.55, Issue 1, pp121-139
- Becker, G. 1993. *Continuity after a stroke: Implications of life-course disruption in old age*. *The Gerontologist*, 33, pp.148-158.
- 柴田博編 2007 『老年学要論』建帛社
- Cohen, E. S., 1988. The elderly mystique: constraints on the autonomy of the elderly with disabilities. *The Gerontologist* 28, pp.24-31
- Randall, W. and Kenyon, G., 2000. *Ordinary*

- wisdom: biographical aging and the journey of life*, Praeger, Westport, CT.
- Palmore, E. B. 1979, "Predictors of Successful Aging", *Gerontologist*, 19. (reprinted in E. Palmore et al. eds., *Normal Aging III*, Duke University Press)
- Cole, T. R., 1997. *The journey of life: a cultural history of aging in America* (Canto edition ed.), Cambridge University Press, Cambridge.
- Randall, W. and Kenyon, G., 2000. *Ordinary wisdom: biographical aging and the journey of life*, Praeger, Westport, CT.
- Tornstam, L., 1988., Ensambentens ansikten. En studis au ensambetsuppleueller bos suensker I aldrarna, pp.15-80
- Tornstam, L. 1989. Gero-transcendence: A Meta-theoretical Reformulation of the Disengagement Theory. *Aging: Clinical and Experimental Research* (Milano), 1(1), 55-63.
- Tornstam, L. 1997a. Gerotranscendence: The Contemplative dimension of Aging. *Journal of Aging Studies*, 11.2, pp.143-154
- Tornstam, L. 1997b. *Gerotranscendence in a Broad Cross Sectional Perspective*, *Journal of Aging and Identity*, 2.1, pp.17-36
- Tornstam, L. 1997c. *Life Crisis and Gerotranscendence*, *Journal of Aging and Identity*, 2, pp.117-131
- Tornstam, 1992, *The Quo Vadis of Gerontology*, On the Scientific Paradigm of Gerontology,
- Tornstam, L. 1994. *Gerotranscendence: A Theoretical and Empirical Exploration*. In L. E. Thomas & S. A. Eisenhandler (Eds.), *Aging and the Religious Dimension*. Westport, CT: Auburn.
- Tornstam, L. 1989. Gero-transcendence: A Meta-theoretical Reformulation of the Disengagement Theory. *Aging: Clinical and Experimental Research* (Milano), 1(1), pp.55-63.
- Tornstam, L. 1996a. Gerotranscendence: A Theory About Maturing into Old Age. *Journal of Identity*, 1.1, pp.37-50.
- Tornstam, L. 1996b. Caring for the Elderly: Introducing the Theory of Gerotranscendence as a Supplimentary Frame of Reference for Caring for the Elderly. *Scandinavian Journal of Caring Sciences*, 10, pp.144-150.
- Tornstam, L. 1998, Gerotranscendence—a theory about maturing into old age, *Journal of Aging and Identity* 1, pp.37-50.
- 中野康之, 小田勝利 2001 「サクセスフル・エイジングのもう一つの観点—ジェロトランスセンス理論の考察—」『神戸大学発達科学部研究紀要』8 (2), pp.255-269
- Wadensten & Carlsson 2003, Theory-driven guidelines for practical care of older people, based on the theory of Gerotranscendence., *Journal of Advanced Nursing* 41(5), pp.462-470
- Young, Michael & Tom Schutter, 1991., *Life after Work, The Arrival of the Ageless Society* (Hareper Collins).
- デュルケーム. E. 1985 「個人表象と集合表象」佐々木訳『社会学と哲学』恒星社厚生閣
- 木下康仁 1990 「社会学の課題と可能性」『社会教育』45 (10)
- 木下康仁 1993 「老人ケアの人間学」医学書院
- Tornstam, L., 2005, *Gerotranscendence: A Developmental Theory of Positive Aging*, New York: Springer Publishing Company.
- Tornstam, L. 2003, *Gerotranscendence from young old age to old old age*. Online publication from The Social Gerontology Group, Uppsala. (URL: <http://www.soc.uu.se/publications/fulltext/gtransoldold.pdf>)
- Håkan Jönson and Jan Arne Magnusson. 2001, A new age of old age? Gerotranscendence and the re-enchantment of aging., *Journal of AGING STUDIES*. (15). pp.317-331
- Tornstam, L., & Tornqvist M. 2000. Nursing Staff's Interpretations of "Gerotranscendence" in the Elderly, *Journal of Aging and Identity*, 5.1, pp.15-29.
- Wadensten & Carlsson, 2001, *A qualitative study of nursing staff members' interpretation of signs of gerotranscendence.*, *Journal of Advance Nursing* 36(5), pp635-642

Wadensten, Barbro 2005, Introducing older people to the theory of gerotranscendence, *Journal of Advanced Nursing*, Volume 52, Number 4, November 2005, pp.381-388(8)

Wadensten & Carlsson 2003. Theory-driven guidelines for practical care of older people, based on the theory of Gerotranscendence., *Journal of*

Advanced Nursing 41(5), pp462-470

レオン・ブルジョア 1926『レオン・ブルジョア氏
論文集ソリダリテその他』（桃井京次訳）国際
連盟 協会出版

武川正吾 2006「地域福祉の主流化 福祉国家と市
民社会Ⅲ」法律文化社

One consideration for the re-formulation of “successful aging”: Application and consideration of the Gerotranscendence Theory

TSUKUDA Aki *

Abstract: One purpose of this report is to propose the need for re-formulation of the “successful aging” concept to include vulnerable older people.

At first I point out that “successful aging” in social gerontology is based mainly on continuity and productivity as social adaptation. In addition it has an aspect of instrumental rationalism and functions as a slogan, also representing critical consideration about not including vulnerable older people in the study. In addition, I place it in the context of the Gerotranscendence Theory of Tornstam, from a viewpoint of Disengagement Theory. From this, it became clear, the change of the ontology of “aging” in internal perspective is a process of the adaptation of the individual for vulnerable older people, so it is necessary to make much of the personal adaptation. For the natural development of Gerotranscendence, understanding of Gerotranscendence by other persons and the society is necessary and its strategic promotion is necessary. Finally I suggest step-by-step “successful aging,” showing a problem of the strategy for acquisition of a flexible viewpoint for “aging” as a shift from the “successful aging” of the Activity Theory to the “successful aging” of the Disengagement Theory.

Keywords: successful aging, adaptation, gerotranscendence, vulnerable older people, Disengagement Theory

* Ph.D. Candidate, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University